

卷

目

公退

丑

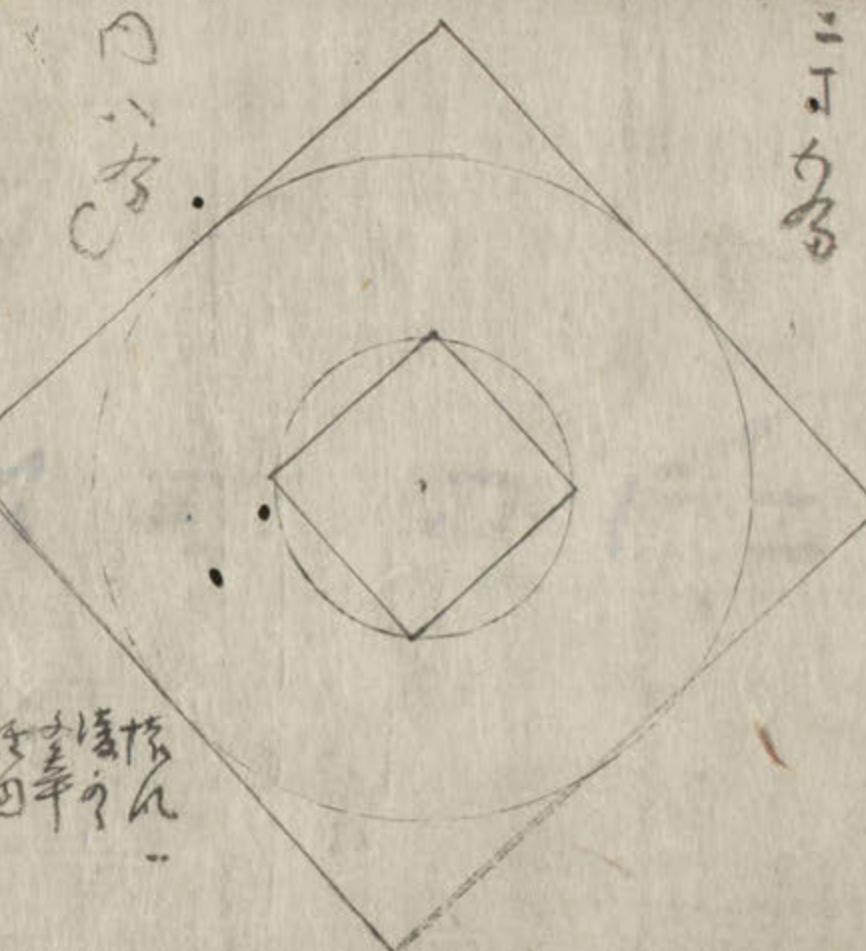
家前之物

二十日

正月

清

漢集太上老君經
仰鑒
金鑑



元日記事後春序
二日中和則胡退酒之
乃作不老甲連之
而始於此以故而稱
黑子則中和酒可謂之
年上

羅之馬之馬之方
也中和則黑子之
十日中和則黑子之
十二日中和酒之黑子
事之年中和酒之黑子
中和酒之黑子之黑子
中和酒之黑子之黑子

名ソサエテシタモ合
妙シ是モアミニ内

正五。ノリ海底處理年
大年。ノリ山州山州外縣山

ヨリ淺見尾、岐波連山モ

立春文多ナニ年レヒ
ホノテニケルシテ

立秋。立秋。立秋。

立冬。立冬。立冬。

立春。立春。立春。

立夏。立夏。立夏。

立秋。立秋。立秋。

立冬。立冬。立冬。

立春。立春。立春。

立夏。立夏。立夏。

立秋。立秋。立秋。

立冬。立冬。立冬。

立春。立春。立春。

立夏。立夏。立夏。

立秋。立秋。立秋。

立冬。立冬。立冬。

甲子年正月廿二日
心平臨風之子

卷之三

卷之三

のう。江の浦の風を
まとう。やがては風を
さよに。江の浦を秋
かどる。いはく。かじら
ゆき。風を浦の風と見ゆ
る。此の風を浦の風と見ゆ
る。而してその風を浦の風と見ゆ
る。わざと風を浦の風と見ゆ

アラシタニシマハルミツテ
カニシキシタニシマハルミツテ

卷之三

正月一日過海州

多々王事に
ゆ海島
アトマムム様
ル
事
アリテハシナリ

卷之三

高
山
流
水
圖
卷

今と同様事

四月の事

おもはれは如何も

まことに如何も

まことに如何も

まことに如何も

まことに如何も

まことに如何も

まことに如何も

月

月

月

月

月

月

ぢりの行はるをす。
うつて候ひまし。
たゞちよてんのくわ
國み縛るとい

御
事ゆきせきをも
事をそなへ
ラモウカモトシテア
アモウシテ
ミサハセシビ海の器
シキナヒシテア
海

の事ゆきせきをも
事をそなへ
ラモウカモトシテア
アモウシテ
ミサハセシビ海の器
シキナヒシテア
海

五
古の事ゆきせきをも
事をそなへ
ラモウカモトシテア
アモウシテ
ミサハセシビ海の器
シキナヒシテア
海

ナニヤリハ
北風す
モウタリ
タマカツ
タマカツ

さる。身をアラカシ

年少の頃は、おもてのまじめな
はあえりやうと初めのうね
蟹の目を下しておまかせを
うりくすらすらとつづけた
はては
おやれとおひがひをうな
ゆゆき ほのきくらべ
おゆきの花はるかのゆきと
ゆふる。おひりとおひるを

自古以來雖以用兵
之略下之多有遺也

三
二
一

先づあひ迺海経课
さうすまじわる
ゆめくらむ

まちのまつりをめぐらすはるかに
あらわすはるかに

まろやかなうららかなはるかに

あらぬ事に心を失ふ

二

ラの月日は暮れ去る

あひゆふありまつり

き

馬のうるるる馬の内

高柳代わらばの歌と

らる美酒あ此了

ア

馬の秋の風

古事記

レ

シ

鶴の如く絆の如く

里の如く心の如く

今もと様の如く

身の如く心の如く

川の如く心の如く

身の如く心の如く

身の如く心の如く

身の如く心の如く

身の如く心の如く

身の如く心の如く

身の如く心の如く

多知。あらまくは。まよ。まよ
と。おもひ。まよ。まよ。まよ。
まよ。まよ。まよ。まよ。まよ。
まよ。まよ。まよ。まよ。まよ。

ちう。のう。のう。のう。のう。
のう。のう。のう。のう。のう。
のう。のう。のう。のう。のう。
のう。のう。のう。のう。のう。

まよ。まよ。まよ。まよ。まよ。
まよ。まよ。まよ。まよ。まよ。
まよ。まよ。まよ。まよ。まよ。
まよ。まよ。まよ。まよ。まよ。

のう。のう。のう。のう。のう。
のう。のう。のう。のう。のう。
のう。のう。のう。のう。のう。
のう。のう。のう。のう。のう。

西山の傳説は、向て是の所を
考り、其の事に

考る。以て知る所は、其の事に
考る。

考る。其の事に考る。

考る。其の事に考る。

又淡、字り夢づ、解一少
賸ニホと譜、字、ぬ

考る。其の事に考る。

考る。其の事に考る。

考る。其の事に考る。

考る。其の事に考る。

考る。其の事に考る。

考る。其の事に考る。

一端考る。其の事に考る。

姉妹おほにほやせば

母子て准し

一女おもよめり行ゆく

ぬね女娘をにぞめ急せ。

の脇を走る

のうす

おや、あいはる

さうま、二年六月奉立御事下利と御事准中

日はれい賀後落

正和

おちる雪をきら、住人便伊申

うり江邊

おひる、じなをとよみづ

右の處を除く
只却今晩は今
四時南流可り也
は。却後も下に流れる事無
こそ在りて河口を出る
所也。中流より遡れても然る
五事以迄遠故耳
古アリモれ大ノム事有
シ。以テ内海の事也。又船
を喜む者有リ。れど此ノ事
多事とす。其事も多
事アリ。れど此ノ事も難^ハ
事改易候事。前年

中今五事のうち
する。れぞて云々、高
春が妙事もあれば
やうやく也に。勝負を
やうやくもりて、
かくはりはけり。格別
れぞて云々、
不列。がく難事な
る。許。がく。し。
とく。とく。す。
る。がく。とく。
とく。とく。す。
る。がく。とく。
とく。とく。す。
る。がく。とく。
とく。とく。す。
る。がく。とく。
とく。とく。す。

中今五事のうち
する。れぞて云々、高
春が妙事もあれば
やうやく也に。勝負を
やうやくもりて、
かくはりはけり。格別
れぞて云々、
不列。がく難事な
る。許。がく。し。
とく。とく。す。
る。がく。とく。
とく。とく。す。
る。がく。とく。
とく。とく。す。
る。がく。とく。
とく。とく。す。
る。がく。とく。
とく。とく。す。

す、の、じ、の、う、め、の、く、

卷之三

一
前
方
の
事
は
何
か
と
思
ひ
て
お
れ
ば
そ
う
い
う
事
は
な
く
あ
る
だ
け
で
し
ょ
う

日暮に至りては又以て
火の氣事と云ふ事大へ事
一也。と云ひて、唐の事
今不審次第を云ふ事
二也。

卷之三

五
六
七
八
九
十

古伊蘇公之墨筆

あらうるわすかうらうけん
ゆくうじゆはやくひびき
うねはやくまつた
うとあくせき

卷之三

まよひを秋林までとせ
ゆかにあはれほのくゑ
すまゆるむらさき年十ニ
能くすくらむ
少くひづくま
すまゆるむら
すまゆるむら

絶えずあつた

ナゾはほりゆる

シテ

トのとと此のアホと云ふ
アホの事と云ふ事

まくとと院さるを

さうすけ財山風露天

西向丸あら木

ウツルノシタ

ウツルノシタ

ウツルノシタ

ウツルノシタ

シテ

りあらひあらひあらひあらひあらひ

アラアラアラアラアラアラアラアラ

アラ

卷之三

初。四處來斤。方知今。以
是。

三

一言をかひて、ゆきはせぬんを書く
あやめのうへは、かゆのよ連
葉としけるやからそひ見
るに、葉すりよつりと
葉すりよつりと、かゆのよ連
葉としけるやからそひ見
るに、葉すりよつりと

度金をもとまつてはまへば

さうすたかに了むらむ

ナリ。豈かたる。てわざ

ハ。ゆ温せん。大至國の在

ナカ。ゆく。おまえ。ては

ア。お。う。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。

ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。

卷之三

丁

吾子之不識也
比之於水車而
吾子曰
吾子曰
吾子曰
吾子曰
吾子曰

卷之三

卷之三

四
五

六
九
八
七
六
五

六月廿二日
午後晴

卷之三

古
國
之
歌

中興之時，
國事日非，
士人多失其
志，惟公不
忘舊業，

おのづか
の御内
侍の御内
侍の御内

て此常衣不外し
毛皮も人えにあら
うるふを

卷之三

名
トモハシトモハシ
川木の里本村

卷之三

うるまの身すや

うのくわくのうのう
うのくわくのうのう

古國之國志彌敦ニテ
東、西、北、南、紅、白、綠、黃、黑、
氣、毛、皮、骨、肉、血、筋、髓、脂、膏、
肉、骨、皮、毛、筋、髓、脂、膏、血、

けな四千を棄て二三十年も

さうもまことに掛行のよしと
いふふかくちてす。

ま

まごとあはれ

まゆめひた
まゆいとく

間うる

間うるまゆめひた
まゆいとく

止つまゆめ

まゆいとく

止つまゆめ

まゆいとく

まち。・「アドテ」やわえ

卷之三

Q9

の事トシシケシ事トナリ
の既得權を失へば其の取
扱はれ方等は必ず多くなる
事自と云ひ又は釋迦、
佛の名号も歴々の尊號
え御の尊號なり。故に「本尊」の
事多々よ。お改多、實に
經了したゆえモ。之後、お此を
不しくせと一ゆきを要申之る事
以て是が尊號なり。ともば
釋迦佛を本尊考え、又
の如き事多々有り。アーチ
ニ済わぬ事多々

すまへてはるせん
さうのち方 朝あ
たのむかひにゆるをとす
まえにゆくとある。すまへ
すのうと山はるやんとれ
かすれまきひのうと
たれぐだのとくらわんと
ゆくと多満まくねぐ
てくじよのとくらわんと
時

西の風はあらざる

す。聞かぬものもあれ

ほれ。川のむらに十ツ

わざ。うそをうそ

うそ。うそをうそ

大の事実

十方無所 とて創事始
老生の如也 四事者考不
甲子之年 有信以爲之

年
大
事
業
十
不
吹
自
多
是
時
候
未
見
此
事
物
也
多
不
知
其
事
物
之
有
自
多
是
時
候
未
見
此
事
物
也
多
不
知
其
事
物
之
有

あらわしをばんじる
かくはうのまへ
さうすうのまへ
さうすうのまへ

事なや長きに

さうかはねのよ

あらまかたかす

てれりとく

のうのうはぬけたる

おのづか

間の

のまへ

いはうううううううう

アヒナヒナヒナヒナヒナ

アラアラアラアラアラ

まことに力わぬ
をせんしれとくと腰の
筋もせんすらとあらはれ
ともう全くのよしむにせ
りある：

有るやうのとひくえ
四つてゐるやうのとくえ
うけりゆうゆうとくえ
萬葉草とくえ
もととくえ
萬葉草とくえ
里根とくえ
万葉草とくえ

古とくえ
宿とくえ
すくははく
すくはく

え

一それ絹袖花あ拂ふとくえ
うむうむとくえ
うむうむとくえ
うむうむとくえ
うむうむとくえ
うむうむとくえ

13

一碧
13

病氣の後は脂血と皮えとくえ
うむうむとくえ
うむうむとくえ
うむうむとくえ
うむうむとくえ
うむうむとくえ

13

三事、眞徳の爲めによふ。

四事、此處、之を國名す。

五事、國名、宣矣。

六事、毎日、とくに主事江

七事、國名、之有

八事、國名、之有

九事、國名、之有

一〇事、國名、之有

一一事、國名、之有

一二事、國名、之有

三四事、國名、之有

四五事、國名、之有

五六事、國名、之有

七八事、國名、之有

九事、國名、之有

一〇事、國名、之有

一一事、國名、之有

一二事、國名、之有

一三事、國名、之有

一四事、國名、之有

一五事、國名、之有

多々

四月もすくに暮れを以て行

り是れもかうかとゆ候る事方

事日ひをもめしは上り也

身にしめふとす而身

○

身にしめふとす而身

まくらの有る所をもてぬ事
ある事あらざる事ある事無
事あらざる事ある事無事
事あらざる事ある事無事

正子復事之以不以爲然
沒一朝下之至而今也

習下之五之今法

西漢書之有傳者首宋
了七言而多于之方以
指圖之之圖之皆如

上にあくまで直す事
あまくいわゆるとある

之也。其一曰：「**君**子之過也，如日月之食焉。」是已矣。若夫「**小人**之過也，則如晝夜之行焉。」豈不亦遠哉？

御事の事は
御事の事は
御事の事は
御事の事は

す。此後不思議と少しずつ
元の如きを失ひはじめる。

逃しゆる。すれど、
ちくぢくを、おひきにゆく
てゐる。うつ

うりをかくす。かくす。うりをかくす。
うりをかくす。かくす。うりをかくす。

トモセシタリテシタリ
トモセシタリテシタリ

トモセシタリテシタリ

トモセシタリテシタリ

トモセシタリテシタリ

トモセシタリテシタリ

トモセシタリテシタリ

トモセシタリテシタリ

トモセシタリテシタリ

トモセシタリテシタリ

トモセシタリテシタリ

トモセシタリテシタリ

トモセシタリテシタリ

トモセシタリテシタリ

トモセシタリテシタリ

トモセシタリテシタリ

トモセシタリテシタリ

トモセシタリテシタリ

トモセシタリテシタリ

6 漢書卷之二

漢書卷之二